

シャドウ・ワークとアート

田中 史郎

シャドウ・ワークという概念があります。それは、しばしば女性によって担われてきた家事など、生活の要となる活動であるにも拘わらず、賃金・報酬を受けない労働を指します。場合によっては、企業での賃金を伴わない活動（アンペイド・ワーク）をさすこともあります。シャドウ・ワークを見過ごしてきたこれまでの経済学をはじめ社会科学に反省を迫るものでもあります。

家事労働などのシャドウ・ワークに光を当てるとともに、それらを学問体系に位置づける構想も生まれました。これまで労働といえば、暗黙に金銭を対価とする賃労働を想定していましたが、そうした想定では捉えきれない労働の存在を認識せざるを得なくなったともいえます。

経済学では、労働を「煩勞」と把握する思想が根強くあります。たしかに、今日の労働は煩勞以外にはあり得ないという現実があるので、その現実をふまえれば、煩勞ではない労働などを想定することは、空想的であるという批判は免れません。

しかし、労働の本質を「芸術」として把握し、それを実現する思想と行動を提起した先人がいます。「アーツ&クラフツ運動」の実践者として知られる W.モリス（1834～96年）です。彼の提起したスローガン"Art is man's expression of his joy in labour." は、今日においても深い示唆をあたえているのではないでしょうか。

（『河北新報』2019年11月16日）